

## 巻頭言

# 災害に立ち向かう人間力

毎日放送

大牟田 智佐子

先日、関東大震災の記録の復刻版を読んだ。銀行員で俳人だった大曲駒村の『東京灰燼記 関東大震災』。駒村は2年前に越してきた新居で大震災に遭う。家人の無事を確かめると火の海となった東京を駆け回り、8日間の様子を克明に記した。行間から叫び声が聞こえ、焼け跡の臭いが漂ってくるような生々しいドキュメントだ。こんな場面がある。駒村に向かって学生が泣きながら話す。「友人が家の下敷きになって、手を引っ張ったがなかなか出ない。そのうちに火が迫り、友人は握っていた手を静かに離した。私は見殺しにして猛火の中を潜って逃げてきた」。また、新宿の焼け跡を訪れた駒村は、1個20銭が相場の西瓜を1切れ20銭で売る西瓜屋が若者に殴られるのを見る。バナナ売りは1房50銭で暴利をむさぼっている。かと思えば新聞紙面は「富豪がそろって100万円単位の寄付を申し出た」というニュースを伝えている。当時の尾上菊五郎が30人あまりの弟子を引き連れ「俳優義勇団」を組織し、救援にあたったという記事も出る。駒村は言う。「而して地上は一度修羅の巷と化した」。

読み進むうち既視感にとらわれた。これは、阪神・淡路大震災で繰り返された人間模様そのものではないか。関東大震災から70年以上たったあの時も、がれきの下敷きになった家族を火から救えなかった人がいた。大根が1本1000円で売られる光景があったかと思えば、救助や支援に身を投じた人がいた。俳優の石原軍団を始め、著名人が被災地を救援に訪れた。この80年、災害はたびたび起きて研究も進んでいるというのに、人は同じことを繰り返している。

賢くなった面は確かにある。防災に使われるハードは格段に進化した。阪神大震災をきっかけに、全国の地震計は一気に800点増えた。そのおかげで、地面の下のことは医療用CT画像の解像度が上がるように、この10年でずいぶん分かってきた。津波警報はいまや地震発生から2分以内に出すと気象庁は発表している。地震発生後瞬時に規模や震度を予測して大きなゆれがくることを知らせる「緊急地震速報」は実用化され、一般公開を待つばかりだ。問題は、それを使う人間にある。

取材をしていると、感心させられることがたびたびある。地震で焼け野原になってしまった神戸のある地域では、地元のリーダーが家人に「町内を見回ってくる！みんなの無事を確認するまで帰らんから、そう思っとけ！」と言い残し飛び出した。ここでは自然と人が公園に集まり、まだ顔を見ていない人を助けに走った。救出の順番は女性が「次は誰々さん！」と指示し、男性はそれに従って動くだけだったという。この地域はその後、被災地で最も早くまちづくりを完了した。新潟県中越地震でも、数多くの高齢者を受け入れる判断をすばやくした福祉施設の所長がいた。入所者ではほぼ満員だったが、廊下に布団を運び込み、弱ったお年寄りを避難させた。新潟では、過酷な避難生活であとになって亡くなる高齢者が多かったが、この施設ではそれを未然に防いだことになる。「なぜそんな判断ができたんですか？」と質問しても所長は「なんとなく普段の経験で…」としか答ええない。彼らは災害の緊急対応を勉強していたわけではない。ただ、行動力と判断力、「人間力」があっただけだ。

こちらは10年以上「地震記者」と称して取材を続けているが、こういう人たちの底力にはかなわない。災害時に必要なのは、このような人間のはたらきなのだろうと思う。私たちの放送局では、土曜日の夕方に「ネットワーク1・17」というラジオの震災番組を阪神大震災の年から続けている。ここでは、地震に関する基礎知識を伝えることも大切に行っている。震災当時は「本震より余震のほうが小さい」ということすら知らず、避難所で何日も眠れない夜を過ごした人もいた。それを踏まえて研究者の知恵をわかりやすく伝えるコーナーがある。しかし、それと同じくらい、いやそれ以上に重視しているのが、震災の経験を語り継ぐことだ。番組には、様々な人がゲストとして登場する。被災者や遺族、ボランティア、ノンフィクションライター、被災者をケアする医師、研究者。「うまくいった話」よりも「あのときできなかった話」「今も悔やまれる話」が記憶に残る。

自然災害は、またいつか別の顔を持ってやってくる。関東大震災では「地震だ、火を消せ」が教訓になった。しかし、その後はどうだろう。ゆがんだドアが開かなかった経験で「避難路を確保」。耐震基準も改められた。ストーブの転倒による火災で自動消火装置が生まれた。津波では、人のことなど構わず逃げよという「津波てんでんこ」の言い伝えも残る。阪神大震災では「建物によって人は死ぬ」「家具の転倒が深刻な被害をもたらす」ということが初めて認識された。

どんな災害が来ても立ち向かえるよう、人々に伝えたいのは人間の体験とドラマだ。彼らの葛藤やつらさ、悲しみを追体験することによって「人間力」をつけてほしいと思う。メディアはそのお手伝いをすることができるのではないか。そう思いながら、今日も放送を続けている。